

カザフスタンのタマ氏族はモンゴル帝国の辺境駐屯軍タマ軍団の後裔か（講演要旨）

松田孝一

モンゴルの西に位置するカザフスタンにはナイマンやケレイトなど13世紀のモンゴル帝国形成期にモンゴル高原で優勢であった多くの氏族や部族の名と同じ集団名を持つ人々が存在する。それらの集団名がモンゴル帝国の拡大とともにカザフスタンへ広がったと推察することは容易だが、その広がった過程の明確な説明は見当たらない。その説明の出発点としてカザフスタンに残る「タマ」という氏族名とモンゴル帝国との関連を考えたい。

カザフスタンの領域では、13世紀にはモンゴル帝国の一部分として「ジョチ・ウルス」が形成され、ジョチ・ウルスが15世紀に解体した後には「遊牧ウズベク」が優勢となり、ついで遊牧ウズベクから分離してカザフ民族が形成され、カザフ・ハン国が建てられ、その統一が解体した後18世紀前半までに大ジュズ、中ジュズ、小ジュズという3つの部族連合が形成された。「タマ氏族」は小ジュズの中の部族のひとつ「ジェティ・ウリ（「7氏族」の意）」という名の部族の下位集団のひとつとして記録される。

「タマ」は坂井弘紀氏の一連の研究¹で解説される英雄譚『チョラ・バトゥル』の主人公チョラ（ショラとも）の出身集団（「部族」）名でもある。この英雄譚はカザフ草原からアナトリア、バルカンのテュルク系諸民族に広範に広がるもので、したがって「タマ」の名はモンゴルより西では一定よく知られた集団名と思われる。また、その英雄譚の版によっては、チョラは16世紀のロシアによるカザン・ハン国征服（1552）に抵抗した人物として描かれ、「タマ」という集団名は、チョラの三代前のタマという人物に起源するとされる。従って「タマ」という集団名は（15ないしは）16世紀起源ということになる。

その一方で、「タマ」という名称は、モンゴル帝国初期に拡大した領土を守備するために派遣された『集史』に記載されている辺境駐屯軍「タマ」軍の名称と一致している。すでに Wikipedia（ロシア語版）「タマ тама」の項で「タマ」が「タマ」軍に由来するとの指摘がある。ただ、両者が結びつく理由の説明は示されていない。また、管見の限りタマ氏族とタマ軍を直接結びつける文献史料も見いだせないのではあるが、本講演ではタマ氏族の名の起源を、タマという人物ではなく、「タマ軍」にあることを示すことを試みたい。まずジョチ・ウルスの領域におけるタマ軍の駐屯地域が小ジュズのタマ氏族の遊牧地域の分布と重なる部分があることを示し、ついでタマ軍がジョチの次男のバトゥのルーシ、東欧遠征に従軍の後に、ジョチの五男シバンの領民となり、15世紀にシバン家のアブル・ハイル率いる「遊牧ウズベク」の一部として現れ、小ジュズの中の「タマ氏族」として知られるに至る経緯を述べるものである。（本講演は2024年8月ウランバートル開催の「モンゴル帝国の遺産：文献資料と文化財」国際会議での研究発表をもとにしたものである。）

¹坂井弘紀「中央ユーラシアの英雄叙事詩『チョラ・バトゥル』の地域的特徴再考：ノガイとカラカルバクのヴァリエントについて」『和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2007』210-229など。